

## 糖尿病治療の最前線

# 高齢の患者さんが 納得できる「逝き方」とは

治療より「自分らしい逝き方」を望んだTさんのケース



担当医 久保 明先生  
医学博士  
糖尿病内分泌専門医  
東海大学医学部  
抗加齢ドック教授

患者氏名	T・S様	年齢	92歳	性別	男性	現病歴	糖尿病 高血圧症 単純性網膜症
------	------	----	-----	----	----	-----	-----------------

**10** 年以上前から診させていたただいているTさんは、御歳 92歳。ヘモグロビンA1cは7.5〜8%で推移しており、あまり良いとはいえない状態です。高血圧もあり、常時6種類のお薬を服用されています。

そのTさんが、最近になって「90過ぎまで生きて来られたから、もう十分。糖尿病の治療はいい。薬は飲まずに、なるだけ自然に逝きたい」とおっしゃるようになったのです。

高齢になり薬の飲み忘れが増えたこと、また、それをめぐって奥さまとのケンカが絶えないことなどが理由のようです。

このお申し出には、私も戸惑いました。Tさんの精神的なご負担を軽くしたいと思う一方、薬を減らすことで、つらい思いをされるのではと懸念したからです。というのも、Tさんは2年前に不整脈の発作を起こしており、お薬を減らすと再発するか

もしれないのです。

そこで、このように申しあげました。「飲み忘れが苦痛なら、様子を見て少しずつお薬を減らしましょう。でも、また発作があるかもしれないですね。Tさんがつらくない方法を一緒に考えていきましょう」と。

Tさんのようにご高齢の方の場合、病気を治すというよりも、残された人生をどのようにその方らしくクローズしていくかが治療の主眼になっていきます。数値だけを見て紋切り型の治療をするのではなく、患者さんが納得できる「逝き方」も視野に入れて治療をしなければならぬのです。

超高齢社会を迎え、今後このようなケースは増えてくることでしょう。安易に答えを出しにくい問題だけに、慎重に取り組んでいかねばならないと痛感しています。